

一朝の礼拝から 1—

「バトンをつなぐ」

ローマの信徒への手紙 12章6～8節

2004年6月4日、当時93才で聖路加国際病院理事長であった日野原重明先生の講演会が開催されました。学内外のお客様約800名が会し、軽快でいて心にしみるご講演にチャペル全体が一体となりました。先生はお医者様でしたが、哲学者であり、音楽家であり、何より「力強く愛を实践される方だ」と感じたことを思い出します。その時の感動とテーマの一つであった“ペイフォアード”のお話しはその後ずっと私の中で生き続けています。“ペイフォアード”とは受けたご恩をその相手に返すのではなく違う形にして次の人に渡すことであって、思いやりのバトンをつないでいく行為です。

さて、私は日々「活水の人たちは優しいなあ」と誇らしく思っています。荷物を運んでいると必ず誰かが「大丈夫ですか？」とドアを開けてくれます。どんな時でも変わらず優しく話しかけてくれる人…、授業の後に消しゴムくずをきれいに集めて席を立つ人…、学生の皆さんや教職員仲間の自然で美しい行為に心があたたかくなります。そのような時、私の前に思いやりというバトンが差し出されているのだと思うのです。

神様は私たち一人ひとりに「良い持ち味とそれを活かす使命」を備えてくださっています。優しさや誠実さ、人を和ませる朗らかさや力強い行動力…、など神様から賜った自分ならではの持ち味を活かす時、きっと他人の心に灯をともしることができて、かつ自分の心もあたたかくなることでしょう。思いやりというバトンが差し出されたら素直に受け取って、さあ発信の準備ですね。自分ならではの良い持ち味を最大限に活かして、次の誰かにバトンをつなぐことができますように…。

橋本 祐子 (就職課)

一朝の礼拝から 2—

「神様のご計画のうちに」

エレミヤ書 29章11節

私は“神様のご計画”という言葉を知ると、思い出すエピソードがあります。それは小学生の頃、良いことが起こった際「ラッキー！」と言った時のことです。この言葉を聞いた両親は、「その言葉も良いけど、神様があなたに与えてくださったご計画の一つかもしれないから、神様ありがとうございますって思えたらいいね」と教えてくれました。この話を聞いた私は、「人生で起こることは神様のご計画なんだ」と思いました。この考えは、年を重ねるごとに心強い味方になっていったように感じます。

例えば自分にとってすごく心細く、不安になる出来事があったとしても、「これは神様の計画かもしれない。この経験から学ばせようとしているのかもしれない」と思えるからです。失敗を経験した時は、もう二度と立ち直れないと思うような出来事が起きても、時間が経てばそれも思い出であり、それらの失敗を踏み台として学べたことが数多くあります。「こんなピンチなことがあってね」と母に話をすると、「そんなことできないと思うことができるのが神様なのよ」といいます。昔の私なら「私の力でできた」と思ってしまいう事もあったかもしれませんが、今は、そう思うことはありません。神様の祝福があるからこそ、今の生活を送ることができているのだとおもいます。

私は礼拝などでお話をする時、その時の自分に必要だと感じる聖書箇所に沿って内容を考えます。今回この箇所を引用したかと言いますと、「進路」で悩んでいるからです。たくさんの方に助言をいただきながら悶々とした日々を過ごしていますが、この箇所を読むと自分の選択に自信を持つことができます。

計画というものの線引きは、私にはわかりません。もしかすると、計画なんてないのかもしれない。これは、私がいくら考えても解決することはできないでしょう。しかし、二度と立ち直ることができない絶望の中にも、神様が私たちを見捨てるということは決してないと思います。だからこそ、これからも神様のご計画を信じて毎日を大切に過ごしていきたいと思えます。

今田 涼加 (音楽学科)